美術

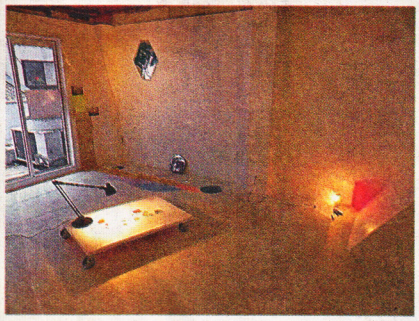
目抜き通りに隣接する路地の一画、焼肉屋のビルの3階という、おそらしくない場所で、小出麻代がインスタレーション（空間構成）を発表している。

インスタレーションといっても、彼女の場合、大げさな作り込みとは無縁である。日常使いの道具や小さなものに新たな意味を与え、断片の集積から物語的世界を紡ぎ出すのだ。本展でも、狭い路地の一画ながら大きな窓と吹き抜けを持つ開放的な空間を生かして、ささやかで、伸びやかで、かけがえのない世界の創出に成功している。

ギャラリー

空間に紡ぐ静かなポエジー

小出麻代展



小出麻代展から

作品の導線は、室内に張り巡らされた糸だ。糸をたよりに視線を動かすと、折り目でリズムを刻む紙の連なりや、モザイクタイル状の色紙、シルクスクリーン技法でラメを貼り付けた鏡などに出合う。続いて回り灯籠と、石をかたどったカラフルな樹脂が。その後、糸は鉛筆に巻き付いて電線となり、あるいは天井から垂れ下がり、待ち針のガイドで壁面に山脈を描く。そして再び床に戻ってフェードアウトするのだ。途中、黄色の延長コードが良い仕事をしていたことも付記しておこう。

一つ一つの要素が美しく、空間に効果的な点を打っていく。それらを見た者の心中にはさざ波が連鎖し、ついには静かな陶酔へと導かれる。この感覚は絵画や彫刻といった視覚芸術から得られるものとは別ものだ。むしろ詩の読後感に近い。そうか、小出はインスタレーションで詩を詠んでいたのだ。（LABORATORY＝河原町通三条上ル一筋目東入ル　9日まで）

（小吹隆文・美術ライター）

□　□　□

シュヴァーブ　トム展（虹＝蹴上　9日まで）不法投棄された自動車などがある森の情景を、特殊なカメラで360度撮影、ゆがみを修整して正12面体の展開図の形で展示している。複眼で物を見るような、普通の写真ではあり得ない空間表現を楽しみたい。

京都新聞
2013.6.8